

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 27, No. 2 神奈川県立生命の星・地球博物館 Jun. 2021



アカウミガメの放流

アカウミガメ *Caretta caretta*
鹿児島県南さつま市 吹上浜
1992年8月16日

おおしま みつはる
大島 光春(学芸員)



※1 鹿児島県のウミガメパンフレット . <http://www.pref.kagoshima.jp/ad04/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/umigame/documents/umigamepanhuh22.pdf>
※2 2006. ウミガメ保護ハンドブック環境省自然環境局.

梅雨時はアカウミガメが産卵する季節です。アカウミガメは5～7月に砂浜で産卵し^{※1}、子ガメは45～75日後に孵化^{ふか}します^{※2}。私が初めてアカウミガメの産卵を見たのは、1991年6月の吹上浜でした。そこでは鹿児島大学ウミガメ研究会が産卵・孵化の調査や保護活動を当時から続けています。

写真は、子ガメ放流会のときのものです。はじめにウミガメの生態や甲羅の骨格などについてのレクチャーがあり、いよいよ放流です。砂浜に放たれた子ガメは^{ひれ}鰭をゼンマイ仕掛けのようにぎこちなく動かして、海へ向かって歩きます。野生

生物に触れて“かわいい”と感ずること、生き物を慈しむ機会をつくることは大切な教育活動だと、私は考えていました。

ところが約30年後の現在、子ガメ放流会はほとんど行われません。ウミガメの生態に合わないというのがその理由です^{※2}。孵化から放流会まで待つために孵化してすぐの子ガメが活発な時間帯を逃す上に、本来子ガメが海に入る夜間ではなく昼間に放流されるために捕食されやすくなるそうです。

「自然科学のとびら」を開ける生物観察という教育・普及活動は、見直しが必要になることもあるのです。

絶海の自然 一硫黄列島をゆくー

かるべ はるき
荻部 治紀(学芸員)

はじめに

今夏、当館で硫黄列島の自然を紹介する特別展を予定しています。本来、昨年夏に開催されるはずでしたが、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言を受けて、延期されたものです。

もう、はるか昔の出来事のような気がしますが、調べてみると一年前のちょうど今日（執筆は4月7日）、初めての緊急事態宣言が発出されていました。この期間の感染者数は神奈川県で最大77名と、その後の第二波、深刻だった直近の第三波を経験した今の我々から見ると、それほど多い感染者数ではない印象です。慣れてきてしまっていますね。現在すでに感染者の急速なリバウンドや変異型の拡大が心配されていますので、今夏もはたして開催できるのか、ドキドキしながら準備を進めています。

硫黄列島とは

さて、前置きはこのくらいにして、本題に入ります。皆さん「硫黄列島」という言葉は聞いたことがありますか？ 火山列島とも呼ばれますが、東京の南方の約1,200 km

の海域に点在し、小笠原群島の100 kmほど西側に位置します。

列島の中では、第二次世界大戦末期の玉砕で著名な硫黄島（中硫黄島：23.73 km²、最高標高170 m）はよく知られた存在と思いますが、この他、北硫黄島（5.57 km²、最高標高792 m）、南硫黄島（3.54 km²、最高標高916 m）があります。これらの島々は、位置的には小笠原群島に近接して存在していますが、伊豆諸島に連なる火山列に属します。

南硫黄島は平均斜度45度と急峻な地形であり、陸上に水域が存在せず、人が住んだ記録はない原生的な環境です。2017年の調査の様子を取材したNHKの番組をご覧になった方もおられるかもしれません。一方、北硫黄島も急峻な箇所が多いものの、平坦地もあり、水場もあることから、かつては二つの集落があり、第二次世界大戦前までの最盛期には220名が在住していた記録があります。

列島の中では、硫黄島は名前のとおり今でも火山活動があり、各所で硫黄噴出物が見られます。この活発な活動のため

にその面積は年々拡大しており、現在では小笠原群島の父島をぬき、諸島中最大の島になるまで成長を遂げています。これらの島々は、戦禍で徹底的に破壊された硫黄島、戦前には人が住んでいた北硫黄島、歴史的に原生環境が保存されてきた南硫黄島と、自然環境も人為による影響の歴史も多様で、また比較的歴史が新しい島々でありながら島固有の動植物が知られるなど、生物学的に非常に興味深い地域となっているとともに、いずれの島も一般の人が上陸することが禁止されていたり、立ち入りに厳しい制限があったりと、訪問が事実上不可能な立地にあります。

とくに南北硫黄島は、無人島の中でも、海洋訓練を積んでの上陸や登攀道具を使用しての登山などが必須で、今では貴重な「探検隊スタイルで初めて調査できる過酷な島」でもあります。筆者は、小笠原諸島の昆虫の研究や保全を継続してきましたが、その経験を活かして、これらの島々で実施されてきた近年の学術調査すべてに参加してきました。

これまでの探検調査の成果の一部は、



図1. A: 南硫黄島全景(2017年). B: 南硫黄島, 調査隊出発(2017年). C: 父島・大神山神社. 神頼みもします(2019年). D: 北硫黄島全景(2019年). E: 北硫黄島, 物資荷揚げ(2019年). F: 北硫黄島, 昆虫隊出発(2019年).

当館において、2007年冬季に「日本最後の秘境 南硫黄島」、2018年秋季に「日本最後の秘境 南硫黄島～10年ぶりの学術調査から～」として企画展で紹介してきました。海況が安定する酷暑の夏季に実施される調査は、絵に描いたような過酷な作業でもあります。

過酷な調査

南北硫黄島は、登攀技術が必須とされる場所になっており、筆者を含むほとんどの研究者は、これまでの人生で一度も使ったことのない（この島々の調査がなければおそらく一生縁がなかった）、ユマール、エイト環^{かん}などの登攀道具の使用方法の実技訓練を受けるほか、上陸時には怪我防止のためにウェットスーツを着用するので、船からボートへの乗り降りや上陸を想定した、海洋の訓練も実施します。海洋部分ではプロのダイバーの支援、登山部分では同様にプロの登山家の支援を受けて、はじめて調査が完遂できます。とくに2019年の北硫黄島調査では、80mほどの高低差の絶壁にいきなり放り込まれ、隊員たちの「聞いてない！」という絶叫が山間にこだましたとか。それでもあそこまでいってしまうと人間根性でなんとか登ってしまうものです。

我々研究者サイドとしては、とにかく根性で頑張って、短い滞在時間の中でできる限りの調査をして成果を挙げるしかありません。そのため、調査隊の皆さんは各自の居住地では筋トレ、走り込み、登山などできる限り肉体スキルをあげ、中にはパワーアンクル（足首に付けるおもり）を装着して鍛えた隊員もいました。

出発前の準備も、個人で行う通常の調査とは全く異なり、持ち込む物資も大量です。何より外来種の影響がほとんどないか、ごくわずかな地域に入るために、我々が外来種を持ち込まないように、細心の注意が必要です。物資はすべて燻蒸^{くんじょう}を行い、厳しいチェックを受けます。また、身に着けるものは、下着からクツまですべてを新品で行くようになっています。厳しい自然環境の島に行くので、本当は履き慣れた、あるいは着慣れた装備で行きたいところです。これは最初に実施した南硫黄調査で、生物を持ち込まないようにするにはどうすればよいか？を

検討していく中で、「結局、新品で行かない限り、外来種の持ち込みを防止することは不可能」ということから構築されたものでもあります。学術調査といえども、自然への負荷をいかに軽減するかは大きな課題で、ここまで厳密な検疫を実施をしているのは、国内では他には例はないでしょう。

いざ本番！

準備は大変ですが、いざ本番になると、子供の頃に夢見た「無人島探検」を地で行く「オジサン・パラダイス」になり、日常生活から離れた、ある意味夢のような楽しい日々でもあります。男子校のような純粋に男だけの世界は、女性には想像しにくいものかもしれませんが、みな子供に戻って、日中の調査から戻ると、ベースキャンプではバカな会話やイタズラもしながら（*こういう場面だけ見ると、とても「著名な研究者」とされている人たちとは信じられないでしょう）、楽しく、チームの一体感を持って活動するのも、過酷な調査の中では、実は非常に重要なのです。

南北硫黄島は標高も高く、島の中腹より上部は、常に雲に覆われる雲霧地帯という特殊な環境になっています。酷暑の海岸から登山しながら標高を上げていくと、今度は霧の中になり、肌寒いような体感になります。平坦地がほとんどないと荷揚げ物資を軽減するため、ツェルトと呼ばれる簡易テントでの宿泊になります。いずれの島でも飲み水は得られないため、水は2Lのペットボトルを大量に登山隊に荷揚げしてもらい、調査員たちも各自の身の回りの品と飲み水4L（それだけで4kg）、調査道具を満載して登攀していきます（図1B）。

南北硫黄島は、このように過酷な調査を強いられる島ですが、かつて人間が定住していた北硫黄島では、各所で生活の痕跡が残っています。石段や井戸、ガラス瓶など、無人島の中で見るとドキッとすることがあります。独特の雰囲気があるのか、いわゆる靈感など信じない人間が多いのに（自分もその一人）、北硫黄島を訪問したことのある人たちの中では、「妙な体験をすることがある」ことでも有名な島で、怪談には事欠かない島でもあります。ある隊員は、白昼一人で



図2. ミナミイオウヒメカタグムシ。



図3. ミナミイオウトラカミキリ。

歩いているときに、崖上の草をかきわけて進む隊列のガサガサという音と話し声を聞いて、「あ、先に行った隊員たちか。ルートはあんな所に行くのか」と思っていたら、後でそこは全くルートではない人が通れない場所であることがわかったり、ある隊員は夜間観察中に無線交信していたら、誰だかわからない人と話していたり（その時は隊員同士で通信しているつもりだったが、該当の隊員は無線担当ではなかったことがあとでわかる）、白昼、誰もいない山中で煙があがっているのを複数の人間が確認したり、と短い滞在中にもいろいろな体験談があります。

閑話休題。これまでの調査では、学術面で多くの成果がありましたが、これらの島々は火山活動で島になってから数万年程度という、島としては若い存在です。地球上では他のどこにも生息しない固有の生物が存在するのは、大変興味深いことです。筆者の専門分野の昆虫でも、後ろばねが退化して飛べないゾウムシの仲間やカミキリムシの仲間など、比較的大型の昆虫でも固有種が知られています（図2、図3）。

今回の特別展では、硫黄列島各島の生物相の比較と固有種を中心にした紹介、探検調査の準備から実施までの流れなどを紹介します。乞うご期待！

神奈川展示室の部分リニューアルー資料収集から展示までー

ひろたに ひろこ かとう
広谷 浩子・加藤 ゆき (学芸員)
すずき さとし まつもと りょうこ
鈴木 聡 ・松本 涼子



図1. リニューアルされた神奈川展示室「神奈川県海岸と生物」。

1. はじめに

神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、当博物館）は、横浜市にある神奈川県立博物館（現：神奈川県立歴史博物館）の自然史部門が独立する形で誕生し、1995年3月21日に一般公開を始めました。それから26年後にあたる2021年3月23日、常設展示の一部を更新、一般公開を始めました（図1）。この経緯を紹介します。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために臨時休館をした2020年春に、3階神奈川展示室でヘラジカ本はく製の劣化が認められました（図2）。表面の亀裂や胴芯の崩れなど状況は深刻であったため、温度管理されている収蔵庫に移動することになりました。あわせて、ヒグマやツキノワグマのはく製、化石レプリカなども撤去し、代わりになる新しい展示を計画することになりました。

多くの博物館では展示テーマに沿って展示を行っています。当博物館のテーマは「生命の星・地球」。常設展示では、46億年にわたる地球の歴史と生命の多様性を時間の流れにそって、標本や模型、写真等で紹介しています。今回、更新をした神奈川展示室では、神奈川県の大地の生い立ちや相模湾にすむ生き物を紹介しています。新しい展示を計画する

にあたって、既存展示のストーリーから外れないよう、考えていかなければなりません。

更新場所は、陸の生物を紹介している「神奈川の大地に生きる」と相模湾の生物を紹介している「相模湾に生きる」との境に位置していました。今回の更新を担当した現生動物チームは、海と陸との境界である「海岸」の生き物を紹介すれば、無理のない展示の流れになるのではないかと考え更新案を作り、作業を進めました。タイトルは「神奈川県海岸と生物」とし、海辺で観察される野鳥、イルカやクジラなどの海棲哺乳類、ウミガメの漂着や産卵について、これまで収集して

きた標本を活用して紹介することになりました。あわせて、大陸から日本列島への生物の移動を解説するためのパネルを更新、移設することになりました。

2. 展示を作る

■展示台のお掃除

まずは、展示物の取り外し（図3）と展示台の修繕（図4A）です。ヘラジカは高さ3mもあり、取り外し作業は半日かかりました。役目を終えたはく製は、殺虫処理を行った後、1階の収蔵庫へと移動。全ての展示物を取り除いた台座には、開館から26年間働き続けた彼らの影が、照明焼けによりしっかりと残っていました。



図2. 展示更新前。ヘラジカの本はく製を学芸員が点検。



図3. ヘラジカの撤去作業。支柱を組み、はく製を持ち上げ足元に移動台を入れる。

■背景は森から海へ

これまで、ヘラジカの生息地に近い景色として針葉樹林の写真が背景に使われていました。今回、これを一変し、藤沢市の辻堂海岸から江の島を望む構図で撮影した写真を使用しました(図1)。この周辺には、これまでにアカウミガメやオサガメ、スジイルカ、ハナゴンドウなどが漂着し、当博物館は骨格標本等を収蔵しています。辻堂海岸の景色を壁全面に映し出し、迫力ある展示作りを目指しました。

■展示台を作る

このコーナーには、正方形と半円形との二つの異なる形状をした展示台があります(図4A)。この特徴を生かし、台ごとに浅瀬と砂浜の環境に分けることにしました。浅瀬には、海に集まる鳥たちのはく製を配置し、天井裏からオオセグロカモメとウミネコのはく製をワイヤーで吊るし、展示空間を立体的に活用しました。

砂浜の再現には、地学の学芸員に伝授された地層はぎ取り標本の作製方法を参考に砂シートを作製しました(自然科学のとりら Vol.20, No.3参照)。まず、短冊状に切った不織布の表に水で溶いた木工用ボンドを塗り、砂をまぶします(図4B)。さらにその上から、水で緩めに溶いた木工用ボンドをスプレーして固めていきます(図4C)。ボンドが乾燥すると、バリバリの味付け海苔のような状態になります。

展示台には雛壇を置いた後(図4D)、背景パネルを設置して展示台が完成しました(図4E)。雛壇の上には、標本を保護するための低反発シートを敷き、所々重ねて起伏を作り、砂浜らしさが出るように土台を作っていました。この上に砂シートを並べ、繋ぎ目にはボンドと砂を混ぜて作ったパテを、スポンジケーキにクリームを塗る要領で隙間を埋めました(図4F)。これら一連の作業では、学芸員がアイデアを出し合いながら、博物館にある材料を集めて行いました。

■標本・解説パネルを並べる

いよいよ標本を並べていきます。まず、天井に上り吊り物の位置を決め(図4G)、はく製にワイヤーをつけ引き上げ、上下に動かして実際の位置を決めました。台に置く標本は通路からよく見えるように何度も確認しながら位置を決め、ワイヤー等で固定しました。じっくりと見て欲しい



図4. 神奈川展示室の展示更新の様子。A, すべての展示物を撤去した後、業者に展示台の破損個所の補修や再塗装を依頼した。B, 砂シートの作製のため不織布にボンドを塗り。C, 不織布に砂をまぶした上からさらにボンド液をスプレーして固定。D, 展示台の修繕が終了後、雛壇の設置をすすめる。E, 背景パネルを設置して展示台が完成。F, 砂シートを雛壇に並べる。G, はく製を吊るす位置を確認するために天井に上る。H, 通路からの標本の見え方を検討しながら最終的な位置を調整。

ものは最前列に配置しました(図4H)。展示物の準備と並行して作成した解説パネルを最後に設置しました。こうして、2021年1月にヘラジカを撤去してから約2ヶ月後に展示が完成しました。

3. 展示の見どころ紹介

鳥類、哺乳類、爬虫類の資料を担当する学芸員がそれぞれ展示物の選定や展示で伝えたい内容を決め、資料の配置やバランスなどを協議しました。以下が、担当者からの見どころ紹介メッセージです。

3-1. 海辺で見られる野鳥

■展示する種の選定

海辺と言っても環境は様々で、磯もあれば砂浜もあります。港もあれば城ヶ島のように崖地もあり、観察される野鳥は環境によって異なります。季節や天候、また年によっても鳥相は大きく変化します。

日本野鳥の会神奈川支部がまとめた『神奈川の鳥2011-2015』によれば、これまで神奈川県の海辺では150種ほどの野鳥が確認されています。これらのうち、海辺を訪れた時に「普通に観察される鳥」及び「季節や天候によるが観察の可能性が高い鳥」など、観察機会が多い種を紹介することにしました。

そうすると、ほぼ一年を通して見られるカモメ類は外せません。次いで渡り鳥であるシギ・チドリ類、ウ類、コアジサシのほか、近年、観察頻度が高いアホウドリ類やミズナギドリ類を選びました。さらに、春から秋にかけて海水を飲むために海岸に飛来するアオバトも加えました(図5)。

■はく製はどこから？

今回、展示をしたはく製は、新たに作製したものではありません。当博物館では、

これまで、鳥獣保護施設等で保護後、回復せずに死んだ個体を譲り受け、標本へと加工してきました。今回展示をしているのはく製も同様で、収蔵庫で保管し、講座等で活用していたものです。なかには、ユリカモメのように年数がたっており、羽の傷みや色あせが見られるものもあります。これらのはく製は検体の入手を待って、交換を進めていきたいと思っています。

■ちょっとした「工夫」

小さなコーナーですが、神奈川県にゆかりのある種を多く展示するよう工夫をしました。例えば神奈川の県鳥は「カモメ」、ユリカモメやウミネコなどカモメ類全般を指し、ここでは4種6個体を紹介しています。県指定の天然記念物関連では、「城ヶ島のウミウ、ヒメウ及びクロサギの生息地」にちなんでそれぞれのはく製を、「大磯照ヶ崎のアオバト集団飛来地」にちなんでアオバトの雌雄のはく製を展示しています。

はく製の足元には四色の布を敷きました(図5)。これは種ごとの生息環境を表しています。例えば、アオバトの足元に敷いた緑色は、普段くらしている森を表しています。シギ・チドリ類とコアジサシの足元は砂浜を表す灰色、水際は水色、岸から離れた海域は濃い青色で表しています。鳥には翼があり広範囲を移動するので、必ずこの環境で観察されるとは断言できませんが、イメージとして楽しんでいただければと思います。

3-2 ウミガメの展示

■ウミガメの標本収集

神奈川県の海岸にウミガメが漂着すると、死骸の回収依頼が博物館に寄せら

れることがあります。これまでに、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、稀にオサガメなどが漂着しています(図6)。なかでもアカウミガメは神奈川県での断続的な産卵報告があるため、特に身近な種として展示標本に選びました。



図6. 辻堂海岸に漂着したオサガメを回収する松本学芸員。ブルーシートの下に死骸が埋まっている。(2020年8月5日、辻堂海岸)

展示している甲羅は、2019年10月に大磯町の海岸に打ち上がったものを当博物館で標本にしたものです。漂流している間に失われてしまったのか、頭部は残されていませんでした。この死骸を収集する際、不審人物として通報され、警察官から職務質問を受けたため、大変印象深い標本です。この甲羅の横に展示している頭部は、2014年6月に小田原市江之浦で採取され、当博物館に寄贈された標本です。ウミガメの死骸の収集から標本作製の過程は、自然科学のとびら(Vol.26, No.4)を是非ご覧ください。

■カメの甲羅の構造

展示されている甲羅は、お腹側を上にした状態に配置しています。ウミガメの甲羅の内側を見る機会はあまり多くはないであろうと考え、このような配置にしました(図7)。甲羅の骨は、ドーム状の一つの骨だと思われるかもしれませんが、実は複数



図5. 海辺でみられる野鳥。はく製の足元には、それぞれの生息環境をイメージした色の布を配置した。

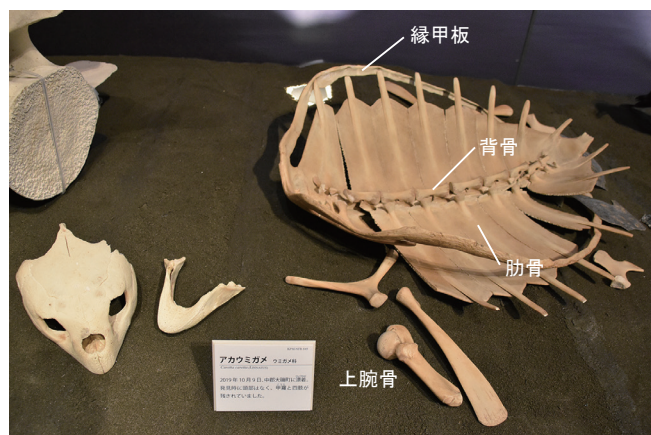


図7. アカウミガメの甲羅をお腹側から見たところ。

の骨が組み合わさっています。甲羅の中央に一列に並んだ円柱状の骨が背骨、その両側に張り出した板状の骨が肋骨ろいこつになります。隣り合う肋骨の接合面には棘状の突起があり、これらががっしりとかみ合う様子はオモチャのブロックのようです。甲羅の外枠には、短い棒状の骨がいくつも繋がって環状に連なった「縁甲板えんこうばん」が位置します。藤沢市の鵜沼海岸などでは、肋骨など骨の一部が時々落ちており、博物館に同定依頼がくることもあります。皆さんも海岸を散策した際、ぜひ探してみてください。展示されているような骨の一部が見つかるかもしれません。

■カメの胃の中には？

多くのウミガメの死骸は、研究者によって、最初に解剖が行われるため、博物館に持ち帰る際は内臓が抜かれた状態になっています。しかし、時には未解剖の状態でも博物館にやってくることもあります。今回の展示更新では、当博物館で解剖した際にアオウミガメの胃から出てきたプラスチックゴミ等を展示に加えました。

その中には、ビニール袋やお菓子の包み
など私たちの生活に身近なものも含まれ



図8. ボランティアの協力を得て砂を掘る。
(2020年12月5日、酒匂川河口)



図9. 掘り出されたナガスクジラの頭骨。
(2021年2月20日、酒匂川河口)

まず、海藻や藻類^{そうるい}を主食とするアオウミガメにとって、これらが餌に見えたのかもしれませんが。出会う機会の少ないウミガメ達ですが、この展示を通して、ヒトと海の生き物の生活環境は、密接に関わっていることを再確認してもらいたいと思います。

3-3 クジラの展示

■クジラが博物館にやってくるまで

クジラのような大きな動物がどのように
収集されて博物館の標本になるのか、今回
展示したナガスクジラを例に紹介します。

2020年8月の朝、小田原市の酒匂海岸にナガスクジラの死骸が漂着し、波打ち際に横たわっていました。全長13mほどのこのクジラは、腐敗が進んでおり、折れ曲がった腰からは真つ白な椎骨が露出していました。死骸はその日の午後、重機により波打ち際から80mほど離れた砂地に運ばれ、深さ2mほどの穴に埋められました。

当博物館ではナガスクジラの標本を所蔵していませんでした。記念すべき1点目のナガスクジラの骨格標本、何とんでも回収したい！4ヶ月後、ボランティアに集まっていただいて、人力による掘り出しを試みました(図8)。1日では終わらなかったもので、学芸員だけで、ときにはボランティアと一緒に何度も海岸に通って、掘り出し作業をしました。現場は、サラサラした砂地のため、少し掘っては、周囲の砂が崩れてまた埋まってしまうということの繰り返しでした。2月になって、どうにか掘り起こしの費用を捻出し、富士スタンディングネットワークによる重機を使った作業で、クジラの骨が掘り出されました(図9)。

■大きいわりに軽い骨

2021年4月現在、ナガスクジラの骨7個(椎骨6本、上腕骨1本)を展示しています(図1)。この標本はナガスクジラとしては小さく、骨幹こつかんと骨端こつたんが癒合ゆごうしていないことから幼獣であることが分かりました(図10)。

骨を持ち上げてみると、大きさの割に意外



図10. ナガスクジラの上腕骨. 分離していた骨幹と骨端を接着して展示している.

に軽いと感じました。骨は体を支える役割を果たしているため、大型動物になるほど重くて丈夫になります。しかし、浮力の働く水中で暮らすクジラの骨は、体を支える必要性が低いので大きさの割に軽くなっています。骨の密度が小さく、よく見ると小さな穴がたくさんあります。

■クジラの耳

クジラと陸生哺乳類の違いはたくさんありますが、本展示では耳の骨の違いを紹介しています。哺乳類の耳の骨は、耳周骨、鼓室胞および耳小骨（ツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨）で構成されており、クジラも同じです。多くの哺乳類では、これらの骨が頭蓋骨と一体化していますが、クジラでは耳の骨は頭蓋骨から分離しています。水中で音を聴くため、このように進化したと考えられます。

4. おわりに

これまで当博物館では、1階展示室の解説パネル・標本ラベルの更新や標本の新設・入れ替えのほか、1階 生命展示室の「どんぐりと生き物」、3階 ジャンボブック展示室の「箱根火山」や「神奈川県植物誌」、「人類進化」といった各コーナーの更新を行ってきました。しかし、神奈川展示室での標本類の全撤去を伴う展示更新は初めてです。はるか、江の島を臨む湘南の砂浜が再現され、空を漂う海鳥やカメの甲羅やクジラの骨を見ていると、どこからか波の音も聞こえてきそうです。展示を見て、湘南海岸の今を実感してもらいたいと思います。

加えて、この新展示は、日頃の資料収集活動の成果を紹介したものとなっています。海の生き物特有の悪臭や、クジラを回収するために掘っても掘ってもすぐに崩れてしまう砂地をものともせず、海辺に刻まれた生き物たちの生息の証を残そうと奮闘するスタッフの姿を、展示を通して想像してもらえたら、うれしく思います。

最後になりましたが、今回の展示に関して死骸回収や加工、更新作業に協力いただいた天野忠明さん、石井雅之さん、加賀玲子さん、木村洋子さん、最勝寺朋子さん、重永明生さん、一寸木 肇さん、県小田原土木センター、神奈川ストランディングネットワーク、富士ストランディングネットワーク、哺乳類ボランティアの皆様

催し物のご案内

当館は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、臨時休館や事前予約制などの入館制限を行なっている場合があります。最新の情報は、当館ウェブサイト、および公式Twitterでお知らせしますので、ご来館の際は必ず事前にご確認ください。

特別展「絶海の自然 ー硫黄列島をゆくー」

2021年7月17日(土)～10月31日(日) 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日：9月6日(月)・13日(月)・14日(火)・21日(火)・24日(金)・27日(月)
10月4日(月)・11日(月)・12日(火)・18日(月)・25日(月)

小笠原諸島に含まれる硫黄列島は、硫黄島とその南北に位置する北硫黄島・南硫黄島の3島からなります。各島には固有動植物が知られており、歴史の古い小笠原群島と比較することで海洋島の生物進化を知る良いサンプルとなっています。調査の様子を紹介しながら、あまり知られていない硫黄列島の魅力を伝えます。



ライブラリー通信 文人たちの博物誌⑨ さくらもこの巻 小学生のももこはゾウガメを見ていた!?

つちや さだお
土屋 定夫 (司書)

さくらもこといえば、もちろんあの国民的アニメーションである「ちびまる子ちゃん」の原作者の漫画家であり、またエッセイストとしても知られています。

彼女は多くのエッセイ集を遺しましたが、その中に『ももこのいきもの図鑑』というタイトルだけで中身が分かるような一冊があります。これは雑誌「anan (アンアン)」に1993年3月から1年間連載したものをまとめたエッセイ集です。

「いきものについての思い出をテーマにしよう。これならいくらか書けるよ」と気楽に思いついたそうです。そうして連載された46編は、少女期から結婚後までの彼女と生き物たちとの様々な出会いを伝えています。抱腹絶倒の文章からは、その時々情景が鮮やかに浮かび上がってきます。

小学2年生の頃に自宅の近くに開店したペットショップには、犬や猫はもちろん、チンパンジーまで売っていて、しかも店先には大きなゾウガメがヒモで縛られ、並べられていたそうです。子供心に「こんなの売っていいわけ? 買う人もいるわけ?」と心配になったと、「ゾウガメ」の回で述懐しています。今では当然、考えられないことですが、ちょっと羨ましいですね。

また、「アリ」の回では、アリの行列を見ていて、何も運んでいない、ただ歩いているだけのアリがいることに気付き、きっと怠け者のアリがいるに違いないと考え、アリの研究をしたことが書かれています。「捕獲編」と「研究発表編」に分け、実験の様子と成果を発表しています。結果は基本的にはアリは働き者であるが、しかしながら怠け者のアリもいたと報告しています。

実はこの研究は、のちにアリの研究者が同様の実験を行い、『働かないアリに意義がある』(メディアファクトリー新書2010)という本にまとめました。ももこは研究者と同じ視点でアリを見ていたということですね。

それぞれの動物に付いている著者のカラーイラストも楽しいですよ。



マガジンハウス 1994年

《 当日受付の講座 》

- 夏休み昆虫ひろば[博物館]
日時／①8月7日(土) ②8月21日(土)
各10:00～12:00、13:00～15:00 ※①②は同内容。
対象／幼児～成人

《 事前申し込みの講座 》

詳細は、博物館ウェブサイトや催物案内をご覧ください。

- デジカメ片手に展示を楽しもう ～親子で展示見学ポートフォリオづくりに挑戦!～[博物館]
日時／7月17日(土) 10:00～16:15
対象／小学4年～6年生とその保護者 10人
※保護者参加必須
申込締切:7月6日(火)
- デジカメで楽しむ博物館展示 ～展示見学ポートフォリオづくり&フォトウォーク～(教員向け)[博物館]
日時／8月9日(月・休)・10日(火) 10:00～16:20
対象／教員 6人 ※2日間の参加が条件です。
申込締切:7月6日(火)
- あなたのパソコンで地形を見る(教員向け)[博物館]
日時／8月10日(火) 10:00～15:00
対象／教員 12人 申込締切:7月6日(火)
- 博物館の古生物展示の解説を作ってみよう[博物館]
日時／9月11日(土) 10:00～15:00
対象／学生～成人 12人
申込締切:8月31日(火)
- きのこの観察と同定[博物館]
日時／9月18日(土) 10:00～15:30
対象／小学4年生～成人 15人
申込締切:9月7日(火)
- 大磯の地域資源を楽しむ
～大磯の地形×石材×アオバト～[大磯町]
日時／9月19日(日) 10:00～16:00
対象／成人 10人
申込締切:9月7日(火)
- 身近な野鳥の見分け方②
～水辺で見られる冬鳥を楽しもう～[博物館]
日時／10月2日(土) 10:00～12:00
対象／小学5年生～成人 12人
申込締切:9月21日(火)
- 川と用水路の生き物を調べよう[開成町]
日時／10月3日(日) 10:00～14:00
対象／小学生～成人 25人
※小学生は保護者参加必須
申込締切:9月21日(火)

最新の情報は、当館ウェブサイト、および公式Twitterでご確認ください。

[公式ウェブサイト]

<https://nh.kanagawa-museum.jp/>

[公式Twitter] @seimeinohoshiPR

[混雑情報Twitter] @seimeinohoshiCI

[問合せ先]企画情報部 企画普及課

TEL: 0465-21-1515

自然科学のとびら

第27巻2号(通巻103号)

2021年6月25日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 平田大二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846

編集 本杉 弥生(企画普及課)

印刷 株式会社あしがら印刷

© 2021 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.